みつかる。つながる。よくなっていく。

毎月10日発行　第819号（通巻1323号）

東京YMCA

1・2 2025

創立1880年
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田２－３－18
日本キリスト教会館６階
Tel　03-6302-1960
URL　http://tokyo.ymca.or.jp
発行所　公益財団法人
東京ＹＭＣＡ
発行人　菅谷　淳

東京ＹＭＣＡの使命　東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

能登半島地震被災地支援「のと未来キャンプ」を開催

～自然の中で遊びつくせ！～

自然と仲間と過ごす特別な3日間

2024年11月2日～4日、東京ＹＭＣＡは能登半島地震被災地支援の一環として、輪島市、七尾市、穴水町、志賀町から14人の小学生（1～6年生）を招待し、国立能登青少年交流の家で「のと未来キャンプ」を開催しました。このキャンプは、被災地の子どもたちに自然の中での活動を通じて、たくさんの笑顔を届けることを目的に実施されました。

テーマは一人ひとりの「やりたい」の実現

今回のキャンプは、教育や成長といったＹＭＣＡが培った理念を大切にしつつ、子どもたちのそばに寄り添い、「楽しんだ！」「遊んだ！」という実感をもたらすことを特に大切にしました。緊張した面持ちでの初顔合わせでしたが、時間とともにすぐに打ち解け、グループごとに自分たちの「やりたい」ことを話し合い、ドッジボール、お絵描き、ダンス、シャボン玉など、思い思いに楽しみました。リーダーたちは子どもたちの声に耳を傾け、心の動きを感じとりながら近くに寄り添い、それぞれのペースで過ごす姿を見守り続けました。キャンプ中は、すべての子どもたちが参加できる環境づくりに工夫を凝らし、仲間との交流や助け合いを実感できるように努めました。

全員リレーは大接戦！

遊びと協力から生まれた笑顔と絆

大運動会では大玉転がしや綱引きなどで活気あふれる時間を過ごし、また、屋外での旗づくりでは手に直接絵具をつけて共同作業を行いました。絵具を使ったリーダーのいたずらが始まり、みんなの白いシャツがカラフルで芸術的な作品に！笑顔と楽しい思い出が詰まった特別な一着が完成しました。

活動中は遊ぶだけではなく、仲間を思いやる場面が多く見られました。遊びに夢中になりつつも、ホームシックの仲間にそっと寄り添う子どもや、途中から参加した仲間がすぐに馴染めるよう積極的に話しかける子どもなど、互いを支える姿が印象的でした。これらの体験を通じて、子どもたちは協調の大切さや前向きな行動の重要性を自然に感じとり、思いやりの心も見せてくれました。

リーダーたちの準備とサポート体制

８人のリーダーたちは、このキャンプの目的に添って、万全のサポート体制を整えました。子どもたちのふざけ合いがエスカレートした場合にどう注意するか、危険な行為にどう声をかけるかなど、具体的な場面を想定したケースワークを繰り返し行いました。また、すべての子どもが楽しめるように、待ち時間を最小限に抑える工夫や、分単位で進行を練り上げるなど、細部にまでこだわった計画を立てました。

「みる」という言葉は「見る」「観る」「診る」「看る」など数々の意味があります。今回の特別なキャンプの中で今、自分は目の前の子どもたちをどう「みる」か、常に考える彼らの姿を頼もしくも感じました。

別れの時も笑顔でつながる未来へ

最終日、別れの寂しさを抑えつつ、「さようなら」ではなく「またね！」と笑顔で解散しました。お迎えに来られた保護者の方々に見守られながら、最後までリーダーたちに手を振る子どもたちの姿はとても輝いていました。リーダーとスタッフは、子どもたち一人ひとりの取り組みをしっかりと受け止めることで、自信を育むサポートを行いました。このキャンプを通じて、子どもたちはそれぞれの感覚を信じ、仲間やリーダーとの触れ合いの中で「また参加したい」と思える素晴らしい思い出をたくさん作ることができたと思います。

東京ＹＭＣＡは、これまでも避難所での支援活動やメンタルケアを通じて災害復興支援に取り組んできました。今回も、被災した子どもたちに自然体験や仲間との交流を提供することで、心のケアと笑顔を支援する貴重な機会となりました。リーダーたちの入念な準備とスタッフの連携により、長年培われたＹＭＣＡキャンプの強みが発揮された「のと未来キャンプ」。この特別な体験が、子どもたちの心に深く刻まれていることを願っています。（広報室　ＡＤ　木川　拓）

活発な意見が飛び交うリーダー会

シャボン玉を楽しむ子どもたち

ずっと一緒に過ごしたリーダーと子どもたち

赤▽三角

江東区児童・高齢者総合施設グランチャ東雲を担当して10年が過ぎた。いまだに人口が増加する特殊な湾岸エリアに位置し、年間約12万人が利用する多世代交流を目的とした施設である。（管轄は福祉部長寿応援課）▼コロナ禍以降、障がい者手帳を持つ方の利用が増えてきた。その中に、自閉スペクトラム症（ＡＳＤ）である外国籍の小学高学年のＡ君がいる。多動で心配事も多いが、声をかけると目をそらしながらも笑顔を浮かべ、私の話を聞いていることがわかる。▼保護者とも話し合いを重ね、彼を通して、日本で暮らす外国籍の方のさまざまな困難が見えてきた。言語・習慣・障がい・蔑視と、どれだけ多くの壁に立ち向かっているのかと考えさせられる。▼江東区福祉部が目指す地域共生社会とは何か。スタッフ間・行政と協議を重ね、グランチャ東雲がさらにＡ君の居場所となるよう条例内規の変更手続きも行い体制を整えた。▼ＹＭＣＡ活動は、聖書にある良きサマリア人に示されたように（ルカ第10章）、行って私たちも同じようにする業（わざ）であると考え従事してきた。定年退職を目前に、少し御言葉に近づけたかもしれない。（グランチャ東雲館長　口原恵美子）

東京ＹＭＣＡ 中期計画の策定について

東京ＹＭＣＡでは現在、２０２５年度からの３年間の中期計画を策定中です。その中期計画策定委員会の委員長である上田晶平さんにお話を伺いました。

策定中の中期計画について

今回の中期計画では、２０２５～２０２７年度の３年間の各事業部の事業計画に加え、東京ＹＭＣＡが創立１５０年を迎える２０３０年とその先も見据えて、これからの東京ＹＭＣＡの目指すべき方向を皆さんと共有したいと思っています。

２０３０年は、くしくも世界のＹＭＣＡが２０２２年に共通の目標として定めた「Ｖｉｓｉｏｎ　２０３０」のゴールの年でもあります。この「Ｖｉｓｉｏｎ　２０３０」は、世界１２０の国と地域のＹＭＣＡに関わる若者が中心となり長い期間議論を重ねて作り上げたものです。

従って、今回の中期計画は「Ｖｉｓｉｏｎ　２０３０」で掲げられている４つの柱（＝左記）を反映させます。

また、計画策定の過程でより多くの声を取り入れたいとの思いで、会員だけでなく、ボランティアリーダーなど東京ＹＭＣＡに関わる方々にアンケートを実施すると同時に、スタッフにも意識調査を行っています。

「東京ＹＭＣＡの使命」との関係

東京ＹＭＣＡが目指すものを作り上げることについて、会員より「東京ＹＭＣＡの使命」（以下「使命」）を変えるのか、とのご質問をいただくことがあります。「使命」は東京ＹＭＣＡの存在理由そのものであり、それを変えるつもりはありません。その「使命」の上に立ち、環境の変化などを踏まえた目指すべき方向性を作りたいと考えています。

環境変化への対応

近年、少子化や高齢化に加えて、気候変動の影響など、東京ＹＭＣＡを取り巻く環境の変化はますます大きくなっています。

例えば、出生数は１９７３年に２００万人を超えていましたが、２０１６年に１００万人を割り、コロナ禍を経て２０２４年には70万人を下回るなど予想以上の減少を続けています。こうした出生数の減少は、東京ＹＭＣＡの保育・学校事業だけではなく、青少年が参加する多くのプログラムにも大きな影響を与えることが予想されます。

一方、東京都の人口は海外からの転入者を含む社会増で、当面は横ばいで推移する見通しです。東京ＹＭＣＡが向き合わなければならない社会課題も、外国にルーツのある青少年の増加への対応など変化するとみられます。

また、気候変動などの環境問題については、国際的な調査では若者の関心が非常に高い一方で、日本のＺ世代はその関心が相対的に低いとの結果があり、若い世代への環境教育は重要になっています。

今回の中期計画は、こうした環境の変化も踏まえた具体的な計画を策定したいと考えます。

策定委員会について

中期計画策定委員は、私を含めて10人です。女性は６人。ユース世代（18～35歳）が中心です。現役のボランティアリーダーや若手フタッフ、ＮＰＯ法人で活躍されている方など多くの方に加わっていただき、昨年７月から月２回のペースで委員会を開催し、活発な議論を積み重ねています。

具体的な事業計画は各事業部で策定していますが、委員会では、「将来の会員の姿」「国際」「寄付・募金」「地域拠点」「ユースエンパワメント」「環境」などについて意見を交わしています。

策定委員会の議論を通じて思うことは、若手スタッフやボランティアリーダーも含めて、東京ＹＭＣＡに関わるユース世代は問題意識が高く、行動力もある大変優秀な方ばかりだということです。ユース世代の柔軟で豊かな発想とシニア世代の経験を生かして、これからの東京ＹＭＣＡが目指すべきものを皆さんと共有できればと思っています。

会員の皆さんへのお願い

現在、前述のアンケートの締め切りを２月末に延長して実施しています。東京ＹＭＣＡがメールアドレスを把握している方にはインターネット上での回答をお願いしており、アンケート用紙を郵送した方にはＦＡＸでの回答も可能にしています。ぜひ一人でも多くの方の回答をお願いします。

また、会員大会や機関紙などの場でも途中経過などをご報告していく予定ですので、その際には忌憚ないご意見をいただければと思います。より多くの方の思いを反映させ、良い中期計画を策定できることを願います。よろしくお願いします。

会員アンケートはこちら（２月末まで）

中期計画策定委員と事務局のメンバー。
右から４人目が上田委員長

「Vision 2030」が掲げる４つの柱

1．Community Wellbeing
（かけがえのない命と健康な社会のために）

2．Meaningful Work
（誰もが夢を実現できるYMCAになるように）

3．Sustainable Planet
（持続可能な地球のために）

4．Just World
（誰も取り残されない平和な世界のために）

いじめに反対 ・・・・ ピンクシャツデー

ピンクのシャツや小物を身につけて“いじめ反対”を訴える「ピンクシャツデー」。この運動は、2007年、カナダでピンク色のシャツを着た少年がゲイだといじめられたことに抗議し、皆でピンクのシャツを着たことから始まりました。今では世界70カ国に広まり、毎年２月第４水曜日を「ピンクシャツデー」として、いじめについて考え、いじめに向き合う取り組みをしています。

日程：2025年２月26日（水）

内容：東京ＹＭＣＡでは、職員や学生、園児などがピンクの物を身につけ、関連イベントなどを開催します。

皆さんも、それぞれの場所でピンクの服や小物を身につけ、この運動にぜひご参加ください。

南センター、２０２５年３月末に閉館

南センターは、１９６１年５月、世田谷区船橋に「世田谷プランチ」として開設されて以来、地域や時代の変化に合わせながらその働きを継続してきました。現在は居場所事業として、誰もが「ありのままに」「安心して」「楽しく」生きられる社会を実現するために、多文化共生スペース▽（さんかく）をスタートしプログラムを展開しています。小学生の学習サポート、外国にルーツのある子どもたちの日本語サポートや年６回の外出プログラムにも取り組んでいます。昨年度からは、外国ルーツの子どもたちを対象としたサマーキャンプを山中湖センターで開催。ウクライナ、リベリア、パキスタン、モンゴル、ネパール、インドネシア、オランダ、中国、韓国など多様な理由で移住してくる子どもたちが参加し大変好評でした。

一方で現会館の老朽化が進み、この居場所事業もよりニーズの高い地域で展開したいとの願いから、南センターの今年度末での閉館が理事会・評議員会で決議・承認されました。多文化共生スペース▽（さんかく）は、東陽町センターに仮事務所を構え、新しい拠点の設置を模索しながら事業に取り組みます。

現会館でのＹＭＣＡの働きは１９８０年から45年に及び、その働きには常に学生ボランティアリーダーが一緒に関わってくれました。南センターは優秀な学生ボランティアリーダーが大変多く育った場所でもあります。キャンプ以外にも東日本大震災では支援活動に手を挙げ、その活動報告も自ら企画し来館される保護者の胸を打ちました。

そうした学生ボランティアリーダーに対して、会員やワイズメンズクラブ、ＯＢＯＧなど多くの力強い支えがあったことは言うまでもありません。場所を変えて展開される居場所事業も、これまでの南センターのように多くの方々に愛され、ボランティアをはじめ多くの支援者や協働者と共にその働きが進められることを目指していきます。

これまで支えてくださったすべての皆さまに深く感謝申し上げるとともに、引き続き新たな取り組みへのご支援をよろしくお願いします。なお、会員登録窓口である南センターの名称は継続されます。（ウエルネス事業部　統括　松本竹弘）

支援企業への感謝と報告「賛助会年会・アドバイザー会」

11月26日、ＹＭＣＡ活動報告ならびに賛助会員への感謝を表す「賛助会年会・アドバイザー会」が学士会館で開かれ、賛助会員10法人をはじめ、アドバイザーや評議員、スタッフなど36人が出席しました。賛助会員には、年会費による支援のほか、チャリティーイベントへの参加や協賛、物品提供、募金への協力など、さまざまな形で東京ＹＭＣＡの公益活動を支えていただいています。

菅谷淳総主事による東京ＹＭＣＡの最新の事業報告の後、氏家純一賛助会会長（株式会社氏家経済研究所代表取締役）から永年継続会員８法人に感謝状が贈呈されました。

続いて、「輪島市町野町避難所支援でのＹＭＣＡの働き」と題し、避難所支援の現地責任者を務めた中里敦港区芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ館長より能登半島地震支援活動の報告がありました。活動開始当初、現地ではＹＭＣＡは認知されておらず、頼りにされる存在ではありませんでした。しかし、人々とのコミュニケーションを重ね、日常生活を取り戻すために共に作業したりするうちに、ＹＭＣＡの人が交代しても温かく迎えられるようになり、しだいに喜ばれる存在となった過程が語られました。また、募金を用いて避難所の生活環境の改善や被災地のお店の売り上げに貢献できたことが紹介され、支援活動が多くの人々に支えられていることへの感謝の気持ちが伝えられました。（広報室）

能登半島地震支援活動報告に聞き入る出席者たち

2024年度 表彰賛助会員

継続55年	日本電波工業株式会社
	株式会社小学館
	株式会社木村洋行
	三井住友信託銀行株式会社
継続30年	清水井産業株式会社
継続25年	株式会社集英社
	株式会社トップナッチツーリスト
継続20年	株式会社ツカサ・エンタープライズ

山手学舎70周年をOBと現役舎生が祝う

山手学舎70周年記念会実行委員　松尾　悠

私と山手学舎の出会いは2001年の早稲田大学入学で、修士課程まで6年間お世話になりました。

山手学舎には300人弱のOBがいます。2024年11月16日、学舎70周年の総会が開催され、対面とリモートで国内外から約80人が参加し、温かい会となりました。

山手会館の5階では、今も昔も、大学や国籍を問わずさまざまな背景を持つ学生が共同生活を送り、多様な価値観を受け入れ合っています。談話室で食事・会話・ゲームなどを楽しみ、毎月の懇談会では深夜まで議論を交わしたことが懐かしいです。時には激しいバトル？もあり、山手学舎でのワクワクの日々に育てていただきました。

YMCAのチャリティーランや街頭募金、学舎存続の危機を乗り越えてキャンプや定例活動などに参加し、今は後輩たちが続いています。OB若槻さん基金により東日本大震災支援活動を行い、長谷川OB会長の奨学金設立を経て、現舎生のボランティア参加（野尻・山中キャンプ、能登支援など）はさらに活発になっています。

話は戻り、70周年記念会では京都の花園教会牧師であるOB篠澤さんがリモートでプレゼンテーションを行い、「生きた魚を見たことがない」という子どものひと言から始まった教会での水族館をはじめとする「子ども支援」を紹介しました。子どもたちの居場所作りや食事支援、生物多様性への貢献など、一つひとつの支援が全て繋がっていると力強く語られ、先輩の話に聞き入りました。

山手学舎は、家族のような仲間です。多くの若者が、山手学舎を「みつけ(る)」、世代を超え「つながる」ことで「よくなっていく」、YMCAのバリューを高めるコミュニティーであり続けることをこれからも願っています。

花園教会水族館の働きはこちら

山手学舎70周年記念会での集合写真

総主事カフェ

東京YMCA総主事　菅谷　淳

総主事カフェにようこそ。

今年も東京YMCAをよろしくお願いします。

年末年始、故郷の新潟で長女家族と過ごしました。長女には2歳になる娘がいて、この子がちょうど「イヤイヤ期」真っ直中。何をしても「いや！」と大泣き。我々祖父母も孫に「いや」と言われないように気を遣うのですが、外出してうっかりエレベーターのボタンを押してしまうと、「押したかったのに―！」と大泣き。母である長女は毎日このイヤイヤ攻撃によく耐えていると感心しました。

さて、このイヤイヤは子どもの成長の証です。2歳前後は自我が芽生える時期にあたります。そのため、ただダダをこねているのではなく、自己主張や感情の制御を学んでいます。脳の前頭前野の機能が発達して、徐々に自分の気持ちをコントロールできるようになり3～4歳ごろからイヤイヤは減少します。

このイヤイヤ期の子どもに対して周りの大人が感情的に怒ったり、否定したりすると、子どもは感情をうまく表現できなくなり、自己肯定感も育ちません。

内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度）」で、各国満13歳から満29歳までの男女を対象に「自分自身に満足しているか」と質問した結果、日本人はそう思うが10・4％、どちらかといえばそう思うが34・7％でした。対してアメリカはそう思うが57・9％、どちらかといえばそう思うが29・1％となっています。日本人は自己肯定感が極めて低いという結果が出ています。イヤイヤ期の子どもに対しては、

1．ある程度やりたいようにさせてあげること、2．何がしたいのか聞き続けてあげること、3．やりたいことをうまく表現できない場合、その気持ちを代弁してあげること、4．どんな小さなことでもできたら褒めてあげること、5．日常に子どもが楽しめるような遊び感覚を取り入れること、6．「どれがいい」と選択肢を与えて選ばせてあげること、などが重要です。改めて並べてみるとどれもYMCAの幼児教育の現場では普通に行われていることでした。

イヤイヤ期の重要性は分かっているけれど、孫が大泣きすると一緒に泣きたくなります。でもこれは聖書の教えにある「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」でしょうか。イヤイヤ、ちょっと意味が違いますね。

イラスト：菅谷　淳

WHO、惜しまれつつ活動終了

1997年11月、東京YMCA杉並センターと東京西ワイズメンズクラブ（以下、東京西ワイズ）のメンバーにより、近隣の成人が気軽にYMCAのプログラムに参加できる「ウォーキング・ホリデー・オギクボ」（以下、WHO）がスタートしました。

初回の参加者は9人でしたが、回を重ねるごとに評判を呼び、多い時には60人以上が参加。「ウォーキング・ホリデー」の名の通り、歩くことを最優先し、毎月末の土曜日に名所・旧跡を巡りました。訪問地の選定や事前の丁寧な下見、ロードマップやスケジュールの作成に加え、次回の活動予定を各参加者に郵送し、東京西ワイズの会報にWHOレポートを必ず掲載するという徹底ぶりでした。インターネット時代にあえてアナログにこだわり、地道にファンを増やしながら、この27年間で269回の活動を実施しました。

2016年発刊のWHO記念誌には、「主事を煩わせないで、会員による会員のためのプログラムを始めよう」という趣旨が記されています。発起人の一人である吉田明弘さんの「西クラブの担当主事が269回のうちに一度しか来なかった」という言葉は、ユーモアとともにプログラムの自主性を強く物語っています。

愛されて27年。楽しく歩いた269回。参加者は延べ1万人を超え、1回約10キロ歩いたとすると、総距離は約2，700キロに達します。大きな事故やケガもなく、安全に守られた素晴らしいモンスタープログラム「WHO」でしたが、2024年12月をもって惜しまれながら終了しました。

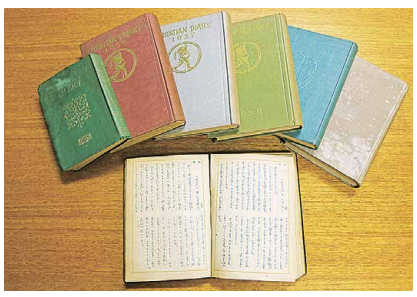
関係者の皆さま、そしてWHOを楽しんでくださった皆さま、本当にありがとうございました。

（東京西ワイズメンズクラブ　元担当主事　小畑　貴裕）

調布から喜多見を歩いた2022年10月の活動の様子。祇園寺を訪れ、歴史に触れた

シリーズ
資料室の窓から〈123〉
『木本日記の中に私』

本会元副総主事　齊藤　實


木本茂三郎氏さんの日記帳（一部）

東京YMCA第6代総主事木本茂三郎さんの日記帳を、令孫中瀬浩太さんが東京YMCA資料室に寄贈された。日記帳は54冊。書き始めは、木本さん32歳、明日は第二子が生れるという1935年6月10日である。「病院は思ったよりも静かな處、安産を祈って帰って来た。和子（第一子で中瀬浩太さんの母）はなかなか眠らなかった。さすがに色々と考えられて眠れなかった。そして、この機を期して日記を附することと毎日注釈書によって聖書一章を学ぶこととした。今リヴィングストン傳、ジョンウエスレー傳を読みつつあり、日記は書くべきものの如く思わる。自分が後に読んで励まされる様な日記を続けたいものである」と。この日から86歳の1989年12月31日までの54年間に及ぶ日記に、文字の乱れはない。書家・藤田霞畦の弟子として隷書を習っておられたからである。

翌「6月11日。早朝電話して安産を聞いた。神の恵みである。有賀氏ヘブル書出づ。序章を読む」。「6月19日。区役所に出産届を済ます。孝子と命名す。大分考えての名なり。聖書ヘブル書第五章。著者、信仰生活の進歩すべきことを説く。誠に愉快なり。時に於ては先生になるべき人が、何れも一年生により居ることなり」。

戦後の日記に「私」を発見。木本さんが、副総主事として東京YMCA再建に没頭して居られた時期である。「1948年8月26日。今日齊藤實君に会う。同君にあっては小生と記念すべき会見である。彼は電気の出身であるが、いよいよ青年会入りを決心した。会員としてはヨハネ会の幹事であり、言わば試験済みである。主事としての大成を大いに望みたい。充分な指導をしたいものである。皆で育てねばならぬ」。私は当時21歳。このように日記にまで記していただいた背景は「時代」にある。敗戦直後、「新日本建設」を主題に掲げて「青年会活動」を再開したYMCAは働き手を求めていたからであった。青年キリスト者のYMCAへの献身が熱望されていたのであった。

第6代総主事
木本茂三郎氏

いんふぉめーしょん　INFORMATION　インフォメーション

■早天祈祷会（3月）■

会員有志が聖書について自分の考えなどを語る「奨励」の後、皆で祈り讃美歌を歌います。クリスチャンでない方もお気軽にどうぞ。

日　時：2025年３月３日（月）
　　７：00～８：00
奨励者：口原恵美子氏（グランチャ東雲館長）
会　場：オンライン／山手センター
問合せ：会員部（03－6278－9071）

■国際協力街頭募金■

バングラデシュの子どもたちの教育支援などを目的とした募金活動です。ボランティアを募集します。

日時：2025年３月22日（土）
　　12：00～16：00＊部分参加可
場所：JR新宿駅周辺

お申込みはこちら　街頭募金の詳細はこちら

ワイズコーナー　Y'S MEN'S CLUB　Vol.25

ワイズが目指すユースエンパワメント ①ＳＤＧｓユースアクション

全国には34都市にＹＭＣＡがあり、東に52、西に72あるワイズメンズクラブが一緒に「ユースアクション」というプロジェクトを数年前から始めています。国連が目指すＳＤＧｓのゴールのための活動計画を若者たちが提案し、全国で10のプロジェクトが始められています。ワイズとＹＭＣＡが資金を出し、１つのプロジェクトに最大20万円を出します。若者たちの自主的活動で、失敗しながらでも達成感を持てる活動になります。人々に喜んでもらえた、役に立てた、やり遂げたという達成感こそが、ユースエンパワメントにつながると思います。

ユースグループは学校でも、ＹＭＣＡのグループでも、あるいはＹＭＣＡ以外のグループでも応募できます。終了後の発表では、実に堂々と、自信をもって報告している姿は、頼もしく感じます。これこそ、ＹＭＣＡとワイズが共に取り組めるユース事業だと確信しています。ちなみに、東京ＹＭＣＡでは多文化共生スペース▽（さんかく）を中心に外国にルーツのある子どもたちの居場所事業をユースアクションとして行っています。

（東日本区理事　山田公平）

「ユースアクション特設ページ」はこちら　動画でわかるワイズメンズクラブ

東京ＹＭＣＡによる外国にルーツのある子どもたちのデイアウト「みっくす！」

大和クリエイティブＹサービスクラブによる不登校をテーマにしたミュージカル

ウクライナ避難者へ 人形劇『てぶくろ』をプレゼント 山手センターに通う親子も参加

詳細は、日本ＹＭＣＡ同盟のホームページで

12月7日、ウクライナからの避難者へのクリスマスプレゼントとして、日本ＹＭＣＡ同盟主催の人形劇観劇会とクリスマス会が開催されました。東京ＹＭＣＡ会員部運営委員長である蒔田敏雄氏のご尽力により、公益社団法人日本児童青少年演劇協会と東京ＹＭＣＡが協力して実現したプログラムです。

会場となった山手センターには、日頃から山手センターのプログラムに参加している日本の親子も含めて約80人が来場し、「人形劇団ポポロ」によるウクライナ民話『てぶくろ』の人形劇に笑い声が響きました。

観劇後はウクライナと日本の子どもたちがゲームで交流し、ウクライナのサンタクロース「聖ニコラス」も登場。会場は大いに盛り上がりました。

ウクライナに一日も早く平和が訪れることを祈ります。

一緒にゲームを楽しむウクライナと日本の子どもたち

ウクライナのサンタクロース「聖ニコラス」が登場

高尾の森 わくわくビレッジ Takaonomori Wakuwaku Village

「春のプログラムスペシャルウィーク！！」

いつもはできない特別なプログラムを体験してみませんか？
「ステンドグラス風ミラー」と「ぬり絵ねんどうちわ」をご用意してお待ちしております！早いもの勝ちです！

日　程：2025年３月26日（水）～３月30日（日）
対　象：どなたでも（小学生以下は保護者同伴）
定　員：各20個　＊無くなり次第終了となります
参加費：ステンドグラス風ミラー　1,210円／１個
　　ぬり絵ねんどうちわ　660円／１個
申　込：当日フロントにて受付　＊事前予約はありません

詳しくはお電話またはホームページにてご確認下さい
高尾の森 わくわくビレッジ ☎042-652-0911 〒193-0821 八王子市川町55 www.wakuwaku-village.com
高尾の森わくわくビレッジはYMCAスタッフが運営しています